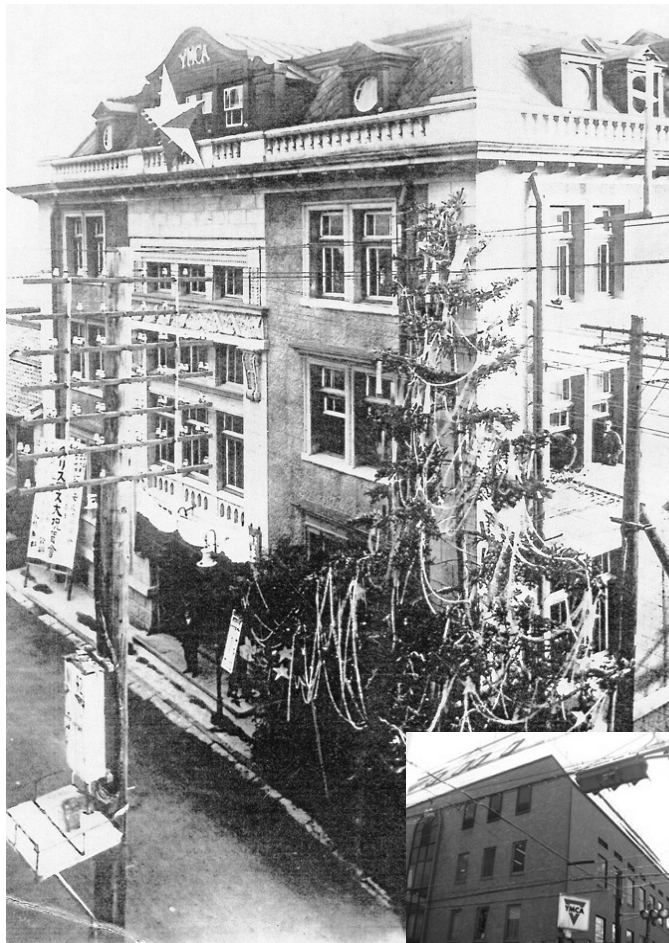


2013年9月15日
第208号

題字 住谷悦治



燎 原 社
(京都の民主運動史を語る会)
代表 岩井忠熊
事務局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823



写真上は戦前の京都YMCA。右は専門学校やウェルネス施設が中心の現在の建物。かつての面影はないが解体前の会館の模型が1階に置かれている。



京都YMCA三条青年会館
(中京区三条通柳馬場角)

無産運動の歴史刻む

〔連載〕 京都の民主運動史 史跡散歩 ②

1910年(明治43年)に建てられた三条青年会館は地上4階、地下一階の外装はレンガ造り、内装は木造という明治の近代建築。設計はドイツ人、ヴォーリズが代理監督を務めた。(78年に解体され、現在は2代目)約千人を収容する講堂は1917年に市立公会堂(岡崎)が出来るまで市内最大のホールであった。このため戦前の左翼運動では「三条青年会館」という行事が多い。

1913年2月、桂軍閥内閣打倒を叫ぶ京都立憲青年会の発会式兼大演説会には三条通りに溢れる3000人の群衆が集まった。20年には「労働問題講演会」(弁士荒畑寒村・堺利彦ら)が開かれ、30銭の入場料であったが千人余が参加した。

1923年の「全国無産青年大会」の会場、24年に開校された「京都労働学校」の校舎もここだった。とくに29年3月15日、山本宣治代議士の労農葬がここで行われたのはよく知られている。

30年にはプロレタリア芸術大講演会(小林多喜二、中野重治ら)も開かれた。

(「京都YMCA史年表」などによる)

京都学習協が50周年 中央労働学校創設期の思い出
岩崎革也旧邸の史資料保存に取り組んで
私の一期一会 ⑥ 生誕100年 渋谷寿夫先生のこと
BOOK 永原誠著「消えた広島 ある一家の体験」

その時、私は… 在日の映画人が服役、福岡刑務所まで面会に
高校三原則を守るため先頭に立った校長 上村栄一先生に聞く
連載「京都民報」私史(6) 「赤旗京都版」開設をチャンスに
研究ノート③ 京大天皇事件のこと

藤井 舒之	2
原田 久	4
佐藤 和夫	6
	8
金 祐 銓	9
小田切明徳	10
湯浅 俊彦	12
今西 一	13

9月例会案内	15
会員消息	16
情報スクラップ	16
催し案内／編集後記	16

京都学習協が50周年

中央労働学校創設期の思い出

藤井 舒之（元京都学習協事務局長）

先日（6月30日）京都市職員厚生会館「かもがわ」で、京都労働者学習協議会50周年を祝う集いが開かれ、講師団、賛助労組・団体のみなさん、歴代の学習運動活動家ら約100人が集まり、この日を祝いました。また、この日は創設以来145期を重ね、3万人を超える卒業生を輩出した京都中央労働学校の創設50周年でもありました。私も京都学習協創立直後から専従となり、第1期中央労働学校から携わった一人として、当時の思い出などをおりませた簡単なあいさつをしました。が、それをもとに当時の思い出の一端をここに記します。

細野武男先生が会長に

京都学習協は63年6月29日、府庁近くの烏丸通に面したところにあつた「京都市民生会館」というところで、結成総会が開かれました。50名の会員が集まり、細野武男先生（当時は立命館大学教授）が会長、機関紙協会事務局長だった吉田保氏が事務局長に就任されました。副会長には井

ケ田良治（同志社大）、木原正雄（京大）、吉田平（自治労・当時）山本正行（京教組）、大久保新二郎（全自交・当時）らがなられました。

その直後、7月に開かれた第1回理事会で、京都学習協の専従事務局員を採用することになり、おそらく8月からだったと思いますが私が専従になりました。当時、南区の米花製作所という、従業員100人ほどの鉄工所で、仲間たちと労組を結成し不当解雇・企業閉鎖反対の闘いを続けておりましたが、それが終結した時でした。

それまで闘争に専念していた私は、学習協のことを名前は聞いていましたが、結成総会やそこに至る約1年間の準備会活動なども全く知りませんでした。地域で労働者教育協会発行の「社会科学基礎講座」をテキストに学習会をしていたことや闘争の中で、「学習の友」を使って仲間たちと学習していたことが専従になるきっかけだったのかなと思っています。

専従として来てみると、後に焼失

した「教育会館」（川端丸太町上る）に機関紙協会の事務所があり、事務局長の吉田保さんが、機関紙協会の事務所の一角に設けた机一つが学習協のセンターでした。

立命館・同志社大が教室

仕事とはいえ、結成に向けて同年2月に開かれた「学習大講演会」（講師は柳田謙十郎・宮川実両先生）に集まった1200人の参加労組・団体・個人の名簿をもとに、各職場の活動家を回り、「学習の友」の購読・普及を訴え、学習会の開催を進めるなどでした。

一方、秋から「京都中央労働学校」を開設することになり、その準備にかりました。これも、町工場の労働者だった私が担当するには、重い仕事でした。立命館大学の細野先生の研究室に何度もお訪ねし、講義の構成はこういう順序でとか、この講義の講師はこの方に、依頼はどの先生からなど、何度も聞き直す私に、丁寧に教えていただきました。労働運動などのところは吉田平さんから教えていただき、立派なカリキュラムが出来上がりました。

講師団もそうそうたるメンバーでした。そのうえ、細野先生や井ケ田先生のご尽力で、教室も前半は立命館大学、後半は同志社大学のそれぞれ一教室をお借りして63年の10月15日から64年の1月31日まで、週2回

執筆者紹介

藤井舒之（ふじい・のぶゆき）元京都学習協事務局長。西京区在住。

原田久（はらだ・ひさし）元京都府立須知高校教諭。南丹市在住。

佐藤和夫（さとう・かずお）本会世話人、前京都市議。伏見区在住。

金祐銓 在韓立命館大学同門会同窓会副会長。韓国京畿道城南市在住。

小田切明徳（おたぎり・あきのり）本会世話人。伏見区在住。

湯浅俊彦（ゆあさ・としひこ）本会世話人。元「京都民報」編集長。大山崎町在住。

今西一（いまにし・はじめ）小樽商科大学特任教授。伏見区在住。

（火・金）、23講義で開校されました。

第1期の入学生は主に職場の活動家で、186名が集まりました。60年安保後の強まる労働組合運動の右傾化攻撃に対して、職場を基礎に、労働運動の階級的民主的強化などが強調され、職場での闘いが広がる中で、活動家の学習要求が高まり、これに応える「京都中央労働学校」への期待が広がりました。また、当時は、「金の卵」などと囃され集団就職で京都に出てきた労働者が多く、大半が中学卒の人たちだった時代でした。そのため、立命館大学や同志社大学で開かれる学校ということも、一つの魅力でもありました。

そして、第1期が終わる修了式を

京都中央労働学校第1期のカリキュラム

第1期く1963>		
	講義科目	講師
1	入学式・記念講演	井上 晴丸・立命館大学教授（交渉中）
	学習のすすめかた	吉田 保・京都学習協常任理事
2	労働者階級のものの方、考え方	細野 武男・立命館大学教授・京都学習協会長
3	弁証法について	貞広 太郎・立命館大学教授
4	社会発展について	井ヶ田 良治・同志社大学教授・京都学習協常任理事
5	自治会總會	
6	資本主義のからくり	吉村 達次・京都大学助教授
7	帝国主義と独占資本	松井 清・京都大学教授
8	資本主義の全般的危機	小椋 広勝・立命館大学教授
9	社会主義のはなし	木原 正雄・京都大学助教授・京都学習協副会長
10	独占資本と中小企業	今井 俊一・同志社大学教授
11	世界と日本のうごき	大隅 逸郎・同志社大学助教授
12	賃金について	辻岡 靖仁・関西労働学校・講師
13	最低賃金と社会保障	坂寄 俊雄・立命館大学教授
14	合理化について	戸木田 嘉久・立命館大学助教授・京都学習協常任理事
15	合理化とのたたかい	戸木田 嘉久・立命館大学助教授・京都学習協常任理事
16	労働組合法	片岡 昇・京都大学教授
17	労働基準法	浅井 清信・立命館大学教授（交渉中）
18	労働運動史	神谷 信之助・京都学習協常任理事
19	労働組合の統一と団結	吉田 平・京都学習協副会長
20	中小企業と労働運動	大久保 新二郎・京都学習協副会長
21	婦人と労働運動	山本 正行・京都学習協副会長
22	平和と独立	佐藤 昭夫・京都学習協常任理事
23	労働同盟と統一戦線	広田 善男・京都学習協常任理事

迎え、そのとき「今回修了されるみなさんが、一人が一人以上の第2期生を集めてくださるよう訴えます。京都中央労働学校は、今回第1期が開設され、無事修了式を迎えました。この学校は、働くものの学校です。みなさんの活躍で見事に第2期生が集まれば、第2期生が第3期生を、第3期生が第4期生をと引き継がれていくでしょう」と訴えがなされました。

72年には728人が入学

64年春に開かれた第2期は、この1期修了生のみなさんの奮闘で、132名が集まって開かれました。それ以来、毎期の修了生が大きき力を発揮して、中央労働学校の歴史が一期一期積み重ねられていきました。その後、専門コースも加えられ、最高の受講生が集まったのは1972年秋の第23期労働学校で728名の入学生を迎えるまでに発展したのです。

これは、ごく一端の思い出にしかすぎませんが、創立50周年の集いに集まった人たちは、さまざまな時代に、文字通り多くの困難の中を、自ら学び実践することを通じて、困難を乗り越え京都の学習運動、中央労働学校を支え、築き上げてきた人たち、講師の先生方をはじめ、賛助労組・団体のみなさん、そして、地域で支えた学習運動の活動家、中央労働学校の受講生や運営委員のみなさんの顔を見ていると、本当によくここまでという思いがいっぱいになりました。とはいえ、また新しい明日に向かっての一步が始まっています。



川端丸太町の教育会館が68年10月24日に焼失したため、同会館内に置かれていた京都学習協事務局も類焼した。学習協はこれに屈せず校舎建設運動を展開、翌年、現在の京都学習会館（上京区葎屋町丸太町上ル）を建設した。（写真）

『燎原』の合本「電子ブック版」発売！

CD-ROM版 各巻頒価 3000円（送料共）

- 第1巻（創刊号から第50号）
- 第2巻（第51号～第100号）
- 第3巻（第101号～第150号）
- 第4巻（第151号～第200号）＝新発売！

*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823（井手方）



岩崎革也旧邸の史資料保存に取り組んで

元京都府立須知高校教諭

原田 久

国道9号線で園部を過ぎ、観音峠を過ぎると京丹波町（旧丹波町）に入る。車で5分ほど走るとやがて左手に須知の町が見えてくる。国道を左にそれ、旧道に入り500メートルほど走ると右手に高い塀に囲まれ、幾本もの大木が林立する庭を備えた豪邸がある。

中に入ると、4本のケヤキの柱に支えられ、今ではほとんど見かけない太い梁が縦横に天井を行き交っている大きな空間が現れる。正面には杉の大木から採った一枚板の板戸がはめられ、左手には片面は板、もう一方の面は屏風の狐戸がはめられている。その戸を開くと座敷が現れ、右手の部屋の鴨居の上には、大養毅揮毫の扁額（明治43年冬揮毫）、その奥の間には田中正造揮毫の扁額、その他にも五枚の扁額が掲げられている。

20年前の調査では、大逆事件の判決を知らせる堺利彦の電報「コオトクホカニジウサンメイシケイ」（明治44年1月18日東京ヨツヤ局発）が発見されている。これらを紹介した

だけでも、この邸の主がただ者ではないことが分かる。主の名は岩崎革也。

幸徳秋水・堺利彦らと親交

私が岩崎革也の名前に初めて接したのは、地元の京都府立須知高校に勤務していた時の先輩、芦田丈司先生の私家本『革の葉』を読んだ時である。革也は小作料が五百石も入る大地主であり、須知町長や府会議員も経験し、須知銀行の頭取も務めた人物でありながら、平民社に多額の寄付をし、幸徳秋水や堺利彦とも親しく交わった。このような人物がこの草深い田舎京丹波町に存在したことに私は強烈な印象を受けた。革也はどのようにして平民社や幸徳と関わりを持つようになったのか、私の「同志」になっていったのか、私の中にそんな疑問が広がっていったことを思い出す。

以来私は、歴史や総合的な学習の時間の授業で、この地に岩崎革也という人物が存在したことを生徒たちに紹介してきたが、特に岩崎革也の

研究を深めることはなかった。

やがて、定年で教職を辞し、岩崎革也の名前とも疎遠になりかけていた時、京都縦貫自動車道の延伸工事で岩崎革也の旧邸が立ち退きになる話が持ち上がった。このままでは、岩崎邸に保存されている革也関係の貴重な史資料が散逸する、なんとか保存と顕彰が出来ないものかという声が、かつて須知高校に勤務した同僚たちの間でささやかれるようになった。

2010年8月、思いを同じくする6人が集まった。うち5人はかつて須知高校に勤務したことがあった。ただ、この時点では私たちと岩崎家の現在の当主長氏（地元京丹波町を離れ、京都市内にお住まい）とは、直接お出合いして話し合う関係にはなかった。岩崎氏とお出合いできる機会を何とかして作りたいと試行錯誤しながら1年半ほどが過ぎ去った。

このような時、私たちのメンバーの2人から、岩崎革也の研究者である明治大学副学長の山泉進氏を迎えて文化講演会を持つてはどうかという話が出た。相談の結果ぜひやってみようということになり、早速準備に取りかかった。実行委員会を作り、なじみの喫茶店で何度も会議を持った。地元京丹波町や京都新聞社の後援も取れ、8月4日に京丹波町の複合商業施設「丹波マール」を会

場に開催することとなった。協力券の普及、カンパの要請に力を入れた。しかし、酷暑のさ中、「岩崎革也の生涯に残されたメッセージ」という硬派の文化講演会にどれだけの参加者があるのか、最後まで気がかりだった。

不安を抱えながら当日を迎えた。会場は80人ほどが入れる会議室。椅子の幅を少し広げて、少人数でも何とか体裁が保てるように配慮した。ところが開会時間前から受付にやって来る人が相次ぎ、ついには用意した椅子が足りなくなり、最終的には補充の椅子を詰め込み、120人の参加者で会場は満員となった。取材に訪れた新聞記者がこのような講演会にこれだけの人が集まったことはないと驚いた。会場にはかつての須知高校の教え子たちの姿も目立った。

現当主・長氏との出会い

実行委員長の松田愛子氏は後のまとの中で「参加者の中には遠方から駆けつけてくださった方もありました。新宮市、岡山、兵庫、東京から、高知四十市長さんからメッセージまでいただきました。それは単に『資料散逸を防いでしるべきところ』に保存することに関心を持たれていたのではなく、新宮や四十市のように、幸徳秋水や大逆事件で犠牲になった人々を地元の先覚者として顕彰することを通して、岩崎革也も

かわった『平民社』やその他反戦平和あるいは社会的平等を掲げた志、そして無類の弾圧の実態にも迫る取り組みを、その地元民の手でやることに大きな意義を見つけられているのだと思います。講演会に駆けつけて下さったのも、先覚者を生んだ地元でそれを掘り起こし、広め学習し輪を広げましょうというメッセージだったと思います」と総括している。

講演会の後の有志参加の茶話会にはハプニングが待っていた。今までお出合い出来なかった岩崎家当主の長氏が、娘さん、お孫さんと共に顔を見せられたのである。自己紹介の中で長氏であることが分かった時、一同驚いた。

これがきっかけとなり、岩崎家と私たちの協力したその後の取り組みが始まることになる。取り組みの中心は岩崎邸と残されている貴重な史料等の保存であった。邸の保存については個人では限界があり、私たちは岩崎氏と共に地元京丹波町にかけ合った。幸い私たちのメンバーの須知高校時代の教え子も役場におり、丁寧な対応をしていただいた。町長にも忙しい時間を工面して私たちの話を熱心に聴いていただいた。一方、史料の保存については盗難等を避けるため、町の配慮で公民館の一室を借り受けることとなった。

搬出に当たっては、府立総合資料館に勤務されている方や京丹波町教

委の担当者の援助を受けた。移動後は実行委員会のメンバーを中心に史料の大きな分類と目録作りに取り組みんだ。江戸期の入会権争議の覚書と思われる文書から「平民新聞」「直言」の実物合本、岩崎草也の日記、堺利彦や幸徳秋水からの草也宛書簡類、須知銀行関係文書、小作料台帳から敗戦直後の地元開拓地関係文書まで実に多様な文書が現れた。

取り壊し前に旧邸見学会

岩崎家の保存については、町から好意的な提案もいただいたが、結果的には現存のままの移設保存は困難になり、現在取り壊し撤去の可能性が大きくなっている。

こうした取り組みを進めつつ、2013年1月14日には邸内初の公開となる岩崎家見学会を行った。見学会には京都府立大学名誉教授の井口和起氏、「大逆事件」の著者で作家の田中伸尚氏ほか、映画監督や歴史学者、地元の郷土史研究者ら20人が参加された。建物調査は地元京都美術工芸大学教授の丸山利明氏にお世話になり、棟札から現在の建物が明治15年に上棟されたことが確認された。

5月12日には、文化講演会の後編として「岩崎草也旧邸見学と講演の集い」を開催した。今回は元須知高校教諭で、早くからの岩崎草也研究者である芦田丈司氏の講演と邸内見学会をセットで企画した。「最初で最



取り壊される岩崎草也の旧邸

後」という京都新聞の報道もあり、当日は200人を超える参加があった。5月26日には映画「百年の罫―大逆事件は生きている―」の監督田中啓氏ら4名が岩崎邸内をくまなく撮影され、14分30秒のDVD「京丹波須知 岩崎草也旧邸2013」にまとめられた。

南丹市立博物館に収蔵へ

その後私たちは草也の書斎に残されている書籍目録作りに取り組み、7畳ほどの書斎は本宅の2階にあり、窓を開けると広大な庭を見下ろせる。ここに残された書籍は1000冊を超える。高島素之の「マルクス学研究」（大正8年版）、幸徳

秋水「廿世紀の怪物 帝国主義」（明治36年版）、河上肇「階級闘争の必然性とその必然的転化」（大正15年版）「貧乏物語」（大正6年版）、中江兆民「兆民文集」（明治42年版）から四書や漱石全集など各分野の書籍が遺されている。歴史的に有名な書籍の現物が次々に現れることに感動すると共に草也の並々ならぬ読書家の一面が伝わってきた。

書き込みも随所にみられ、彼の関心の在りどころが伝わってくる。特に私が驚いたのは幸徳秋水の「廿世紀の怪物 帝国主義」の表紙を開いた時である。そこには漢文で「辛亥一月廿四日佛曉」の書き出しで、幸徳秋水の刑死を悼む文章がしたためられていたことであつた。文面からは草也の深い悲しみが伝わってきた。

その後岩崎邸の膨大な史料は隣の南丹市立博物館に収められることになり、現在はその作業が続いている。また、京都新聞丹波版で芦田丈司氏が15回連載で「草也と丹波―岩崎旧邸の新材料をめぐって―」を現在連載中である。

今後この史料の研究が深められ、広く地元で活用されることを望みたい。

最後になったが、今回の取り組みに大変ご尽力をいただいた井口和起先生はじめ府立総合資料館の関係者の方々、京丹波町の方々に改めて御礼申し上げます。

私の一期一会

⑥

生誕100年 渋谷寿夫先生のこと

妹・富田むつみさんと長男・進さんに聞く

——聞き手 佐藤和夫（本会世話人）

渋谷寿夫（しぶやかずお・1913生―1986没）元大阪経済大学教授は、生年と没年が奇しくも西口克己と一緒にいた。1931年から1945年まで15年続いたアジア太平洋戦争下それぞれの青春時代をおくり、戦後の自らの立ち位置をつくってゆきました。その思い出の一端を渋谷さんの妹の富田むつみさん（1925年生まれ）および一人息子の渋谷進氏（1950年生まれ、前・大山崎町議）に聞き、佐藤の文責で構成しました。

「世界文化」の購読者リストに

——渋谷先生は1913（大正2）年、滋賀県近江八幡の生まれ。大阪府立の7年制の浪速高校から1932年に京大農学部農林生物学科にすすみ、昆虫学や動物生態学を学び、1936年に卒業されました。

そこでおたずねします。「特高月報」昭和十三年九月分に「京都府において検挙せる文化運動関係事件の印刷物配布状況」（世界文化・学生評論・土曜日、その他）として、購読者をリストアップし、「関係当局に於いては視察取締上相当注意されたし」としています。

「世界文化」配布先のなかに、大阪府池田町石橋、石橋荘園内の「渋谷壽夫」という名前が

ありますが、渋谷先生は戦前大阪府池田町におすまいでしたか。

進 池田に住んでいたと聞いたことはありますが、特高にマークされていたと



古希の祝いで（1984年）

いう話は父から聞いていません。父はあまり自分のことを語りませんでした。

むつみ 池田町の石橋荘園内とは120×130坪の戸建ち住宅です。日本で一番早く開発された分譲住宅団地です。兄は池田師範付属小から浪速高校に進学しました。男2人、女4人の6人兄弟姉妹の一番上が寿夫です。私は下から二番目の12歳離れた妹です。

——1930（昭和5）年には、軍事教練反対の三高ストライキ事件がありました。当時すでに学内では共産党や共青などの左翼勢力の組織的な影響はなかったといわれています。（参照：1984年三高同窓会の「會報60」西海太郎論文―ただし、「燎原」No4号・

湖上のボートで「赤旗」読む

山田幸次さんは共青指導に言及している。西口克己は自筆略年譜で、「なんとか処分を免れた」と記述していますが、西口克己は1932年に東大文学部西洋哲学科に入学。三高スト後の学内しめつけにいやがさしたのか、昭和5、6、7年頃に三高から東大にすすんだ連中で千駄木界限に住んだものを中心に「千駄木会」という飲み友達グループをつくっています。戦後も交流が続いていたようで、藤本武（1912年京都府生まれ、1935年東大経済学部卒、劳研研究員）・北條元一・西海太郎とかの各氏の名前があります。北條元一氏は西口の親友の、ドイツ文学者、藤本武は劳研の先輩になります。

一方、渋谷先生は1932年に京大農学部に入學されました。京大生の頃、琵琶湖にボートでこぎ出し、陸地から離れたところで友人から共産党機関紙「赤旗（セツキ）」を見せられたと思い出を生前私に語ってくれました。中国への侵略戦争に反対せよ」と書かれていて、はじめて戦争の本質がわかったといわれました。「赤旗」は1935年2月20日付け第187号で停刊でしたから、京大在学中の渋谷先生の周りに機関紙配布網があったということになります。このボートに一緒にのっていた友人とは、誰かご存じですか。

むつみ 兄は実践運動をしていません。兄も身体が丈夫だったら、1933年の京大（滝川）事件にかかわったかもしれないといっています。

生態学から人間社会を観察

たね。その当時親しくしていたのは、経済学部の人ササキトキオさんと聞いています。京都にでたおりに、東山五条に叔母もおりましたし、四条河原町界隈の喫茶「フランソワ」で京大生の兄と待ち合わせしたこともあります。あのお店の雰囲気の中でコーヒーを飲むのが好きでした。きつとそこにも「世界文化」や隔週発行のタブロイド版「土曜日」も置いてあったのね。

ササキトキオさんと親友に

——では、その1933年の京大滝川事件です。滝川幸辰法学部教授の刑法学が赤化理論と断定され文部省から休職処分をうけ、法学部教授会の総辞職表明と全学学生大会の支援決議でした。この時の学生大会の中央組織は出身高校別の代表者による「高代会議」といわれています。旧制高校の全寮制でつかわれた団

結力を生かした基礎組織だったと評価していますが、浪速高校は学生寮制度がありませんでした。通学生は大阪圏にかぎられているとが、寮生活は弊害もあるのかの理由で。農学部の渋谷さんが経済学部のササキさんと親友であったのは、浪高の同窓生であった可能性がありますね。しかも、法学部学生大会に経済学部の学生大会も連帯決議をあげています。

進 ササキトキオさんは戦後の高山市政1期目に市役所に入り、のちに左京区岡崎の京都市動物園の園長さんになったと思います。戦後、立命館高校に父の仕事を紹介してくれたのも、ササキトキオさんのツテと聞いています。その他、戦後に「民科」



蟻を観察する渋谷寿夫氏（年代不詳）

生物学部会や京大時代の友人と京大理科サークル（1962年発足）をつくり、京大の徳田先生とか、小野喜三郎さんと交流していました。

——1935年7月、コミンテルン7回大会で、ディミトロフが「反ファシズム統一戦線」を提唱し、1936年2月にスペインで人民戦線政府が樹立されました。同年12月に西安事件が翌年9月に第二次国共合作に結実しました。「世界文化」（真下信一・新村猛・中井正一の三名が主宰）は、1934（昭和9）年末から準備され、1937（昭和12）年11月8日の一斉検挙まで続いています。発行のために検閲されている合法雑誌なのに、全体を通読すれば反ファシズム人民戦線を日本で提唱するものと決めつけるひどい論法。1936（昭和11）年に京大を卒業し、1938（昭和13）年9月分の特高月報で「世界文化」の購読者としてリストアップされたことになります。

治安維持法による弾圧も、党や共青などの組織加入によるものから、君主制の打倒をかけるコミンテルン（国際共産党）日本支部の目的遂行に本人の意図にかかわらず客観的に協力したことになるというレッテルを貼り「風が吹けば桶屋

がもつかる」式のこじつけで、あるいは「今や民主主義、自由主義等の思想は共産主義発生の温床となる危険性が多分にあるので、この際国民精神の徹底を図り、之等思想を克服するの要緊切なるを痛感するのである」（人民戦線事件の検挙理由）と拡大解釈がまかりとおる「暗い谷間の時代」でした。この体験が戦後の渋谷先生の原点になっているのではないだろうか。

生態学と進化論史を研究

進 父は生態学と進化論史を研究テーマとしていました。大学の一般教養課程で科学史の講座用に書き下ろされた1982年刊の『科学と歴史』（法律文化社）を見ると、唯物論的な進歩主義者ではあったと思います。戦時中は、ホイラー『昆虫の社会生活』（1941年、創元社刊）やブックストン『砂漠の動物生活』（1943年、生活社）などの翻訳をしています。外国の文献が入手できないと言っていました。

むつみ 本棚に昆虫だらうが蟻だらうが「社会生活」とあれば、特高は社会主義文献と決めつけかねない時代ですものね。戦時中、大阪の空襲もひどくなり、池田の家を処分し、兄が鳥取県大山のふもとにあった農林省開拓研究所に奉職していましたので、そこに一家そろって移り住みました。兄嫁の喜代子さんは職場結婚です。その後、わたしも同じ農林

省開拓研究所に就職し、1950年頃まで在職しましたが、組合に加入していたものの、活動家というほどではありませんでしたが、レッドパージされました。

進 僕は島根県松江の母の実家で1950年に生まれました。先ほどのササキさんが立命館高校への就職を斡旋してくれ、また墨染の府営住宅に当たったので父は妻子を呼び寄せ一緒に暮らすこととなりました。伏見区の藤森小から藤森中学にすみ、日吉ヶ丘高二年の時に大山崎の円明寺団地に引っ越しましたので、西口さんと父とがどういう出会いをしていたかは知りません。

高校を卒業して、フランスのパリで1979年から1995年まで暮らしていたので、その後の父の活動は充分承知していませんが、大山崎文化懇談会代表、大山崎町学者・宗教者・文化人の会、乙訓平民懇代表、「民主府政の会」乙訓代表委員、日本共産党乙訓後援会世話人などをしていたのは、やはり終生、「反戦平和」の旗を彼なりに支えようということだったと思います。

西口と共通の友人・儀我氏

——渋谷先生と西口克己の出会いについては、直接の個人的な交流は確認できません。しかし、戦後共通の友人がいっぱいいます。墨染の府営住宅の近くに在住していた儀我壮一郎（大阪市立大学

教授、1960年代当時）先生です。

進 1960年代初め頃、儀我先生に父が日中友好協会に誘われたのがきっかけで、母の喜代子（1918年生まれ）も先生のご夫人・儀我恵巳さんに立ち上がったばかりの新日本婦人の会に誘われました。私も何回か中井あい先生のお宅に連れて行かれたのを覚えています。

——渋谷先生の最初の翻訳書ホライ「昆虫の社会生活」（1941年・創元社）の「訳者の言葉」では、「土の上を歩く一匹の蟻を見つけたとき、われわれのよろこびは如何なるものであろうか。」「彼らのいとなむ社会生活そのものにまず興味をひかれるからである。彼らの社会生活の意義も結局のところ、生物が自らの生命と種族のそれとを、いかにして維持するかという課題を果たす方法に存するものと言えるであろう」などと、記述しています。いわゆる「虫の眼」と「鳥の眼」を統一する生態学から、人間社会を観察しているみたいです。おい、おい、そんなことをしていると戦争への道を再びたどるぞと忠告がきこえそうですね。

（補注）渋谷寿夫先生の親友ササキトキオ氏は、「燎原」第167号の岩井忠熊「滝川事件以後の十五年戦争期京大学生運動の断章(1)」の佐々木時雄氏であることがわかりました。滝川事件の高代会議の主要メンバーのひとりで、二六会関係者でした。）

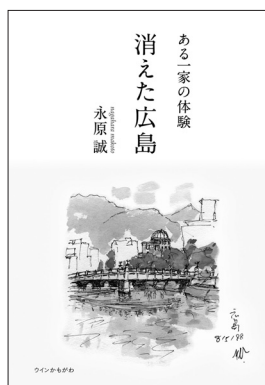
永原誠著 消えた広島

ある一家の体験

京都原水爆被災者懇談会を結成以來牽引してこられた立命館大学名誉教授、永原誠さんが5月23日に永眠され、闘病中に執筆されていた本書は遺作となつてしまった。

永原さんの生家、広島市の鉄砲町は爆心地から1キロのところにあつた。その町で両親と5人のきょうだい、そして伯母の8人が、肩寄せ合つて生きていたが、原爆投下によつて町は「瓦

BOOK



礫の海」となり、父と母、上の妹を失つた。こうして「消えた」生まれ故郷と家族の暮らしを、記憶を頼りに甦らせようというのが本書の前半部である。

3部で構成された第1部は、「幼少期の記憶」。子どもは遊びが仕事である。成長にあわせて家事を手伝い、晴れの日のさやかな行事を目一杯楽しんでる。第2部は「軍都広島」。病弱ゆえに、戦時体制に組み込まれていくことにおびえながら、青年期を迎えた著者である。父は留学生寮の舎監と

原爆で壊滅した町と家族の暮らし

して泊まり込み、2人の妹と伯母は疎開し、家族はバラバラになる。そして第3部「壊滅の日々」が描かれる。8月6日、広島高校で朝の点呼中、建物の陰で熱線の直撃を免れた著者が、地獄の様相と化した街を、家族の安否を求めてさまよう。

黒焦げになった父親の身体はベルトのバックルだけが示していた。女学生の妹は、顔中に焼けを負って収容先の島の死亡した。そして母親も逝った。母のなきがらを自分の手で焼いたあと、生き残った弟とともに、疎開先から引き取った妹2人と伯母をともなつて、大阪の伯父のもとへ旅立つ。5歳だった末の妹は間もなく引き取られた大阪で亡くなった。

著者は、あとがきで、この本をどのように読んでもらってもいいが、この悲惨のうえに2つの国が生まれたことは心に刻み込んでほしいと書いている。それは、日本国憲法第9条であり、非核3原則である。

ウインカもがわ、四六判136頁1050円。(文)

一九四三年、私は広小路キャンパスより約五〇〇メートル南側の地方裁判所裏、堺町竹屋町の田邊哲崖弁護士事務所で事務員として働きながら立命館大学（夜間部）へ通っていた。

一九四三年春、京都地方裁判所より田邊弁護士宛に來た国選弁護委託状と予審決定書を整理することになった。

件名…治安維持法違反事件

被告人…南昌寧

職業…映画撮影助手

大正八年（一九一九年）生

本籍…朝鮮 平安南道 平壤

府新陽里七一番地

居住地…京都市中京区御池下

第二中央アパート内

と書かれたのを見て私は直感的に抗日民族運動に関係する独立運動事件であることがわかった。なぜなら、

その時、
私は……

一〇歳上の兄が治安維持法違反で故郷の平北チョンジュ警察署に拘禁された事実から察することができたのであった。

「独立啓蒙」の映画制作容疑

予審決定は次のような内容であった。

被告は幼年時代より万歳騒擾事件（三・一運動）に連座して刑罰を受けた父南在鎬（長老）の熱烈な民

在日の映画人が服役、 福岡刑務所まで面会に

金祐銓（在韓立命館大学同門会同窓会副会長）

族主義的訓育感化と民族主義が濃い平壤地方の風紀及びキリスト教の影響を受け、民族主義的思想を抱き、朝鮮民族の自由と幸福をもたらすため、朝鮮を日本統治権の基盤から離脱させ独立国家を建てるほかにないと思ひ、その目的を達成するため朝鮮人の文化向上と民族意識を高め上げ朝鮮独立を成し遂げるべく、右京区太秦にある新興キネマ京都撮影所で一緒に働いていた金道漢（演出助手）

と共に謀して独立意識を啓蒙する朝鮮民族固有文化や歴史芸術を素材にした劇映画や文化映画を製作しようと企んだ。このことは、治安維持法第五条に違反することだった。

南昌寧は六月八日、裁判において懲役一年六月が言い渡され、京都拘置所から

福岡刑務所に移送された。

私は予

審決定書

を読んで感動と義憤

を抑えることが

できず、平壤にいる父親に何か私にできることはないかと手紙を書いた。田邊弁護士の承認もなしに京都裁判所内の拘置所に収容されている南昌寧愛国志士を訪ね弁護士専用の面会室で会った。「平壤にいらっ



2010年、福岡での立命館校友会大会に参加したとき刑務所のあった福岡拘置所を訪ねる。1943年と1944年の2回面会した。

しやる父親の上訴意見がありますが被告の考えは？」などと拘置所にうそをつき、所持品、遺品も全て引き取って事務所、宿所の屋上に隠しておいて夏休みに平壤の家に届けた。

南在鎬長老宅を訪ねたとき、長老は、「最近の世相はそうだったことを

親密な友達であ

っても避けるの

に、あなたはど

うして我が息子

のために危険と

分かっていても

助けてくれるの

かね？」とおっ

しやりながら夕

飯をご馳走して

くれた。その席

には李昌鎬牧師（平壤メンア学校長）、康良煥牧師（金日成主席の外叔）もいらっし

やったことも思ひ出す。

*立命館大学ウリ同窓会機関誌『玄海灘』第7号、2012より。

誌面の都合で要約させていただきました。

高校三原則を守るため 先頭に立った校長

上村栄一先生に聞く

聞き手 小田切明徳
(本会世話人)



上村栄一先生

この聞き取りは藤井興一さんのお世話によって実現した。またこの頃の事情として、『京都府高四十年史』を参考にした(この本は藤井さんにお貸しいただいた。「鴨沂高校発足時の学校づくり」をみると上村先生の聞き取り等をもとにしていることがわかる)

——お生まれは？

1918年(大正8年)6月25日、現在94歳です。住まいは八坂神社の南側の月美町です。

——生い立ち、学歴、学生時代の思い出をお聞かせください。

地元の清水小を出て、京都一中を経て、第三高等学校の化学に進みました。途中で物理学に専攻を変えた。卒業して陸軍の気象兵として兵隊に行く。勤務地は三重、神戸を経て東京の陸軍気象部へ、その頃は下士官として、皇軍の勝利を疑わず、天皇陛下のためと思って戦っていた。しかし、気象部での情報が得られた

ので、全体の状況判断ができた。

45年8月15日に重大な放送があると言われ集められ、玉音放送を聞いた時にまわりの様子が少しおかしかった。将校たちには動揺が出たようだった。鐘は悲しそうに響いたように思った。

日本に駆逐艦で戻ってきたとき、私は服に着いていた中佐の紋章を引きちぎって海に捨てた。気象部に属していたので、敗戦前の広島島の原爆についてもオランダで原爆による中性子の被害のことや専門書で原爆政策については事前に見聞していたのです。

鴨沂高校での民主教育 創造の取り組み

——教員時代のことをお聞きします。まずは、鴨沂高校時代について

自宅にかえり、6月頃、京都一中に出かけ、その教頭に会いました。「良いところに来た。先生が足りない、教師をやってくれないか」と依

頼され、教師をやることになった。

赴任した当時、戦後の学制改革の導入(1948年)の移行期で、旧制と新制(6・3・3・4)が同時並行して進められ、当時府立第一高等学校(現鴨沂高校)の校舎には府立一女・府立嵯峨野女・府立一中の生徒3200人が集められ、午前午後に分かれての二部授業が行われていた。そして1948年途中で府下の学区制の導入によって新制高校の再編成が実施されて、生徒も大移動した。それによりこの時京都の高校3原則「総合制・男女共学・小学区制」が確立した。

この変動期にあって教職員も大変であった。上村は鴨沂の時、初めて女の子を教えたが、その時はドキドキした。確か、隣のクラスに女優の山本富士子も生徒としておった。昔は、鴨沂高校は御所の東に位置したことから宮家の女性の女子教育を受け持ち、地元から府立高女として高い評価を得ていた。

さて、この鴨沂では生徒とともに

民主教育について体験的に学ぶことになり、長い教師生活の出発点にふさわしい経験を得たことになった(発足時のこのような鴨沂高校のようすは、同高の教諭であった湯山ちいほさんがまとめられた「鴨沂高校の歴史」と題する資料を頂き、それを参考にしました)。

桃山高時代、日本電池による 就職差別事件が……

——さて、次の赴任校は桃山高校でした。

この学校では15年勤めた。全日制が10年で、定時制が5年、ここでは桃山定時制における、働く青年の教育に接しましたが、印象深かったのが、67年7月の日本電池就職差別事件でした。

この事件が起きる数年前から、京都の中高では部落差別の事象が多発していました。桃高でも63年、同和委員会をつくり、生徒の進路の追跡調査や生徒の部落研クラブを組織し、同和研修会をもっていました。差別についての認識はなかなか深まらなかったようです。そのなかで、日本電池に応募したA君の不採用が報告、会社の担当者が「最も期待している」とするなかでしたから、それを巡って議論がなされ、就職差別反対共闘会議で、職場から進路保障に取り組み、京都府に向けても活動を進めました。全解連の三木一平さ

んにもアドバイスを受けたことがありました。

——この活動を通して蜷川知事の存在をどう感じましたか。

この桃山高校の時に保健部長をやっていたのですが、生徒の通学を巡って企業の協力をうるために蜷川さんに要請をしたことがありました。

田辺高校長時代、工業科単独を総合制にして「校内に活気」が

——田辺高校に校長として赴任された時の当時、学校はどんな状況でしたか。課題として多々あったと思いますが、最もご苦労されたのは何でしょうか。生徒、教員組合分会の様子、学校を取り巻く父母地域の状況をお話し下さい。

私が田辺高校へ行ったのは1975年で、当時は工業科単独制でした。国による学習指導要領の改定で差別選別の路線となり、成績により輪切りされた生徒が集まってくる、生徒は学ぶ意欲がもてずに、学校は荒廃し、暴力、いじめが横行し始め、地域からの信頼も失われる状況になりました。「狼がいるような学校に娘はやれん」「授業妨害やシンナー喫煙が蔓延する学校ではなあ」と厳しい現実を見ながら職員会議の議論では、職員間での異論が出る、父母からの心配にどう対応するのかの議論が続き、すぐにはまとまらずに、結論を得るまで1年かかった。

その間、教職員組合分会では、正暦寺での合宿議論で意思統一を進めました。

——田辺高実践を振り返り、民主教育の教訓とすべき事柄はなんだったでしょうか。

現在のことはわかりませんが、学校での民主教育をすすめるには、まず、教師たちが自分の意見を自由に言えるように、自立して議論ができるように校長としては調整者としての役割をはたすことでしょうか。すなわち、「田辺高校三原則の方向」を分会合宿で、意思統一して深夜までの府教委交渉を進め、75年11月に「来年度普通科設置」が発表されました。教職員が共に力を合わせ進めた結果であり、81年11月28日の「京都新聞」の見出しには、「普通科併設の田辺高校、校内に活気、高まる地元校意識」が載せられていた。



京都府立鴨沂高校の正門（近く取り壊される）

若者へのメッセージ

——最後になりますが、若者へのメッセージをお願いします。

鴨沂高校時代は生徒との接触があり、その頃の者は後にも連絡はあり

ましたが、校長時代にはありませんでした。今の生徒の様子もよくわかりませんが、昔の子らは大人であつたように思います。たとえば、鴨沂高校時代の子には自分でドイツ語を独学して、自己の目標に向かっていく子がいました、自立していたのです。私の生徒の扱いで反省すること、思えばもうすこし褒めることをすべきだったと思います。

——健康管理で気を付けている事はありませんか。

昔は陸上部にいて、北山に登るなどはやっていましたが、とくにありません。

——どうも長い間ありがとうございます。健康に留意され白寿、百寿めざしてください。

あれから60年

南山城水害

民主団体が献身的な救援活動

1953年の「南山城水害」から今年で60年。8月14日から15日にかけて府南部を集中豪雨が襲い、死者・不明者336人、被災家屋5676戸に達する大災害となった。この大災害は、戦中・戦後にかけて治山治水対策をおこたり、荒廃にまかせたことによる人災だった。

直ちに国民救援会・府職組・府学連・部落解放同盟・水道労組などで民主団体水害対策協議会（民水対）が結成され、救援活動に立ち上がった。京都総評も救援活動を開始、円山公園で「水害救援平和祭」を開いて救援を訴えた。

府職組はその中心になり、トラックの手配や救援隊の派遣、現地との連絡など活躍、一カ月にわたり延べ五百数十人が復旧作業にあたった。現地では、地元のボスなどが民主団体の救援活動を妨害する動きもあったが、住民からは献身的な働きに大きな支持をうけた。

（「京都府職労の50年年史」などより）

「京都民報」私史

6

湯浅俊彦

77年3月から推理作家・和久峻三の連載小説「時効成立せず」が始まり、引き続き78年には山村美紗「神獣の森」が1年間連載された。すでに山村さんは超人気作家で「よく民報に」と世間を驚かせた。

「三丹版」の拡充と記者の苦勞

灘井問題で衆院2区の複数立候補は取りやめになり、77年3月から「山

城版」は再び「市内版」に統合、「三丹版」と2版制に戻った。その代わりスペースは全10段とほぼ倍にしまった。入社数カ月で「三丹版」担当となったK記者（現「赤旗」編集局次長）は「交通不便な北部に向くと、列車一本に乗り遅れることが、一日を棒に振ることにも」、後任の記者も「2年足らずで愛車は7万キロを走破した」と後に語っている。

向がようやく実現したと思った。この頃、民報の購読料は一カ月200円、この内50円が赤旗分局（地区委員会）に、15円が府委員会に「取り扱い手数料」として支払われていた。それだけ党の財政にも貢献していたわけである。同時に株式会社京都民報社も黒字で、利益は全戸配布の「民報号外」発行資金に回っていた。

党府政の徹底的な批判者としての役割を果たすことになる。78年11月からは毎号8頁建てに踏み切り、いくつかの新連載を始めた。「黒の人脈 松本明重の巻」は知事選でも暗躍した謀略的人物を徹底究明。新設の芸能ページではチャンバラトリオ（吉本興業）の山根伸介師匠が「私を斬った100人」を連載、爆笑秘話は好評だった。山根氏はわが家の近くに在住、月2回ほど夜、原稿の受け取りに行き、酒を酌み交わした。全く違う世界の人との付き合いは楽しく、時にはわが家にも招いて酒宴、家族ぐるみの交遊となった。

「赤旗京都版」開設をチャンスに

民主府政は落城したが紙面充実

1978年の知事選挙。蜷川後継をめざした杉村敏正氏は43万票を獲得したものの林田悠紀夫氏に敗れ、28年間続いた民主府政は「落城」した。革新分断の役割を果たした山田芳治・社会党代議士（元副知事）は法定得票にも届かなかった。

79年1月からは蜷川さんの「虎三の言いたい放題」連載が始まった。知事退任後、蜷川さんへの執筆依頼は新聞・雑誌数十社から殺到したという中で、下鴨の家を訪ねた私に「民報読者には選挙のたびに世話になったので、ご恩返しの意味で毎週書かせてもらおう」と快諾された。途中、眼の手術で休載はあったものの、80年12月まで毎週書き続け、絶筆も連載の原稿だった。

府庁に掲げられていた憲法垂れ幕は撤去され林田知事が登庁した。「林田知事の反動性くつきり」、はずされる垂れ幕の写真付きで報じた。これまで民主府政擁護・発展の立場から論陣をはって来た民報は、一転自民



市バス全車両に吊された広告

こうした中で、同年9月1日から日刊「赤旗」が「京都版」を設けた。一部からは「もう民報は要らないのでは」といった声が出たが、私たちはこれをチャンスととらえて「京都の日曜版」をキャッチコピーに、打って出ることになった。赤旗日曜版は当時、京都でも十数万人の読者をもっていた。「京都のことは京都民報とセット購読で」の訴えは日曜版読者や党員にも浸透していった。

日々のニュース報道は「赤旗」に任せて、より週刊紙らしい掘り下げた記事や暮らしに役立つ情報、企画記事に徹した。本来めざしていた方

(以下次号)

京大天皇事件のいっ

今西

— (小樽商科大学特任教授)

— 歓迎されなかった 昭和天皇

前回、三重県の実巡幸への反対
を紹介したが、一九五一年一月
の昭和天皇の京都巡幸は、新聞報道
などと違って、実際にはあまり歓迎
されていない。『特審月報』によると、
一月三日付けの『神戸新聞』には、
朝鮮人団体が「十一月の天皇陛下閣
下巡幸を機会に、けっ起する気配が
濃いので国警大阪管区本部では厳重
警戒に当たることにした」という記
事が載っている。

一月二日付けの『毎日新聞』(大
阪版)には、「水谷(長三郎)引用者」
代議士襲撃は計画的犯行」として、「京
都の国際青年デモの暴行事件につき、
京大生などの逮捕状を請求。追求中
の京都市警々備課では、十日首謀容
疑の京大文学部学生小畑哲雄(二五)
を京大前で逮捕」し、「水谷代議士宅
暴行事件はあらかじめ計画的であっ
たことがわかり、共犯学生数名の逮
捕状を請求した」とある。この事件

での小畑氏の逮捕は、本誌で小畑氏
も書いているように、フレームアッ
プである。

そして、同日付けの同紙によると、
「拒否ビラ強制撤去へ」として、「十二
日朝陛下の京都市役所巡幸に際し、
同市職員組合はお出迎えもせず、玄
関の労組宣伝掲示アジビラなども一
切撤去しないと頑張り続けており、
高山(義三)引用者」市長の警告に
もその態度を変更することなく、十
日夜は徹夜で組合員数名が掲示板に
座り込んだ。一方十一日朝十一時か
ら国警県本部で田中警察部長と狭間
市職員局長とが会見、ビラ撤去問題
について協議した結果、組合側があ
くまで撤去に応じない場合は、強制
撤去の態度を決定した」。

翌二日、「午後三時、市理事者側
が市警から警官一個小隊の出動を求
め強制退去を行った。これに対し職
組執行委員会は善後策を協議、お出
迎え拒否」を確認している。それに
加えて、「同夕五時頃、木俣、小西、
梅林の民統三議員は高山市長を公舎
に訪れ面会の上抗議を申し込んだが、



市職の壁新聞事件を報じる京都新聞
(51年11月11日)

物わかれのま、午後七時退去し」て
いる。

一方、同日、「陛下巡幸の沿道一帯
に朝鮮解放救援会その他の労組」が、
「ビラの天覧戦術」を行うと京都市警
は聞き込み、「十一日朝、管内各署に
対し広告条例に基き適切な処置を講
ずるよう」に指令している。「市警側
の根拠となったのは、十日夜朝鮮解
放救援会が府都市計画課に「朝鮮停
戦問題」など、十一種類一万五千枚
のビラ貼付の申請を行い、許可をう
けた事実が基礎となっている」(『大
阪新聞』)。

このように騒然としたなか、昭和
天皇は京都に来るのだが、事件の直
後に出された、日本青年祖国戦線戦
線全国委員会の『青年祖国戦線』の
一八号は、「京大事件」特集を行って、
この頃の様子を書いている(榎並公
雄氏所蔵、以下特に断りのないもの

は同氏所蔵)。

同誌はまず、巻頭言の「京大事件
にさいし全日本の青年に訴える」の
なかで、「島津製作所では、賃上げ
要求を闘っている労働者のひどい生
活には見向きもしなかった会社側の、
天皇を迎えるため補修費は五百万円
にのぼり、十一日夜、市警が市役所
の職員壁新聞を、むりやりもちさり、
京都大学には、同学会執行委員の逮
捕、文化祭の禁止、原爆展開催の妨
害などがつづいた」と、その陰悪な
雰囲気を与えている。

同誌の「京都に捲き起こった平和
の歌声」というルポでは、京都の市
民が、いかに天皇を迎えるのに、無
関心であったかがよく描かれている。
作者は、「あの街この道に感激は溢れ
て」「京都全市は歓呼に沸いた」とい
う一三日の夕刊各紙の報道を批判し
て、市井の人たちの声を聞いて回る。
五〇年配の男性の「天皇は何とかか
んとかいっても戦争犯罪人じゃない
ですか」という声を聞き出している。
またルポでは、労働組合、学生たち
は、「特に京都で平和擁護運動の中心
となっている京大、島津製作所、飯
野産業に巡幸することに、その目標
が端的に現れており「強い平和運動
の鎮撫のためではないか」(『学園新
聞』一月二日)」という主張も紹
介している。このルポには、一二日
の天皇事件の現場報道も書かれてい
るが、紙数の関係で省略する。

二事件は計画的か 自然発生的か

また『特審月報』に戻るが、一月一日付けの夕刊『フクニチ』には、「黨員が京大生を指導、天皇制打倒運動を企図」として、「取調べ当局の情報によれば、天皇関西御旅行前の十月末、日共関西地方委員会から「天皇巡幸に対する闘争」指令が出ていることがわかった」とする記事が載っている。この一〇月末の指令は未見であるが、前回紹介した「宮内庁行幸啓 昭和二十六年 総理府公文卷十四」（国立公文書館所蔵）には、次のような文書がある。

昭和二十六年十一月二十日

法務府特別審査局(調) 日共府

委緊急通達(二六・一一・一六)

「全党は京大の英雄的大闘争を支持せよ」要旨

一、京大を中心とする自由を守る斗いは米帝(アメリカ帝国主義—引用者)及び吉田(茂—引用者)を中心とする反動勢力に大打撃を与えた。

二、労組の実力斗争を強化して京大に集中した敵の刃を味方の主勢力である労働者の斗いに移す。

三、敵は事件をデッチあげる可能性がある。幹部の防衛に注

意せよ。

これは事件後の京都府委員会の通達であるが、「一一・一四 大阪で関西地方ビューローが開かれ、当面の斗争方針を決定した右方針に関する通達を入手している」として—その要旨—「十一月斗争の勝利、京大の斗争は偉大で英雄的であった。二、京大事件を全国的に拡大し、国際的問題に発展せしめよ。三、水長(水谷長三郎—引用者)は実力で粉砕させた四、自由と平和を守る斗いは実力以外にない。ここに新綱領(五一年綱領—引用者)の精神がある。

としている。もちろん法務省特別審査局や警察、政府などは京大天皇事件に対して、共産党の「陰謀」説であった。

これに対して、事件の当事者たちは、「偶発」性を強調している。京都大学職員組合特別調査委員会の『京大天皇事件調査報告』(一九五一年二月廿日)という文書がある。ここではまず一月六日に、市警本部長および川端警察署長と京都大学学長、補導部長、学生課長との会見が持たれ、一二日の天皇の訪学について、次のように取り決められたとしている。

一、交通整理の為、一ヶ分隊(制服一一名)及び天皇の身辺警備の為、私服若干名(約二〇名)



1951年11月12日、京大を訪れた天皇に学生たちは公開質問状を発し「平和の歌」で迎えた(京大吉田分校正門前)

を当日学内に入れること

二、奉迎線は大学当局が定め、学生の行動に対する責任は大学がとること

三、学外の奉迎人を奉迎の列に加えないこと

四、大衆の行動が騒擾的となり、大学当局による奉迎場内の整理不可能の段階に達した場合、この騒擾を誘起せしめた者の氏名が明らかであるよう、予め手段を講ずるという形態で、大学当局は警察当局に協力すること。

報告書は、「この協議の際、天皇来学時に何らかの歌が歌われ、プラカードが掲げられることは、既に予想さ

れていた」とする。しかし、これらの行動に対する具体的な対策は、「特に問題」にはならなかったとしている。ただ、警察当局は一月七日の「水谷氏宅投石事件、天皇に対する同学会の質問状呈出、更に十一月九日同学会が大学当局に対して行った天皇来学当日の警官入構拒否により、状況を不穏と判断し、十一月一〇日頃(日は不明確)臨時予備隊を編成した。

一二日当日は、「警察当局は、同学会が学長の面会を拒否された事実及びプラカードの作成などの情報により、情勢悪化と判断し」、その対策を市警当局から川端署長に電話で伝達し、署長は補導部長に連絡した。その場合の「最悪事態」とは、「御通路

民主運動史を語る会 9月例会

とき 9月20日(金) 午後2時～4時半
ところ 東山いきいき市民活動センター会議室

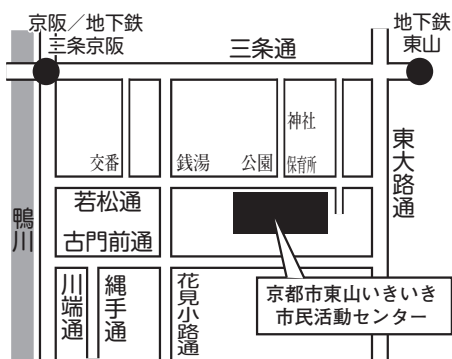
花見小路通古門前上る東入る南側

テーマ 戦後京大学生運動史研究で
明らかにってきたこと

語る人 山本正志さん(京大学生運動史研究会)

1971年、京大理学部宇宙物理学科卒。在学中、京大同学会委員長など学生運動。卒業とともに日本共産党専従、2007年4月まで京都市会議員(5期20年)。現在、河上肇記念会世話人、高等教育研究会事務局長なども務める。左京区在住。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。



に学生が座り込む等の事態」であったが、大学当局は、その予想を否定している。しかし、「来学当日の京都大学警備の最高指揮者は総務部長であった」が、警察は「前掲の予備隊として四〇〇人を近衛中学に待機せしめた」。

報告書は、「正門守衛」の証言として、「午後一時八分頃、同学会が分校(本部構内真南隣、元三高)にて開催予定し、大学当局にその許可を申請中であった原爆展が不許可になった為、二〇名ばかりの学生が、この旨を分校にて一般学生に報告の後、喚声をあげて突然東側警備線南端に現われ、西方向に移動し始めた」としている。

しかし、「一時一八分、四本のプラカードを所持した数名の学生が、時計台東側に現われ、西側の植込みに位置した」という「同学会の計画性」が云々される「プラカード」問題については、「天皇来学に際してプラカードを掲げようという何らかの議論は」、同学会でも、「プラカード所持者である文学部学生の所属する

文学部自治会」においても、「正式の議論」をしていない。しかも、「プラカードは、その時作成されたものではなく、「国際青年デー」(一月七日)用として放置されてあったプラカード四本を当日数名の学生が運んだ」ものであった。

天皇が一時二〇分に来学すると、「本部車寄せの東側から、多数の人に『平和を守れ』の歌声が聞こえてきた」。しかし、NHKのアナウンサーも証言しているように、誰も「正門から本部までの通行を妨げられていない」。奉迎の人びとが車を「包囲」したことも、「奉迎人最前線が或いは時に自主的に後退している事実」から見ても、「一定の行動意欲をもたない単なる群衆の行動であったことを物語っている」としている。ここでも「同学会委員の若干名」は、必死に「来迎人」に後退すべく指示している。

この時刻に、「警察のパトロールカーが、大学の命令で、解散」と放送した」が、「奉迎人は、彼等に発せられた「解散」なる用語の意味を理解することが出来なかった。「この放送は、事務局長の指示により、大学事務職員によって行われた。この放送の終了後直ちに数十名の武装警官が入構し来った。以後、武装警官は数回に亘って入構し、場内整理に当たった。最後の警官隊入構後、天皇は踵を接するが如く本部を出て、

出門した」。

報告書は、「天皇来学前後に発生した事態は、統一貫した意図に統率された秩序ある集団の行動がもたらした事態ではなく、群衆としての行動がもたらした事態であった」と結論づけている。私もまた、吉田分校と文学部の一部の学生の「扇動」はあっても、一二日の行動は自然発生性の強い民衆運動であったと考えている。しかし、警察やメディアは、これを大きく取り上げ、国会でも学長から青木宏同学会委員長まで喚問して、大事件に発展する。そして、水谷事件で留置されていた小畑氏ら八名の同学会役員が、みせしめ的に処分されるのである。

ここでも私が呆れたことのひとつは「天皇行幸に混乱が起ったことについて、京大当局は十三日、学部長会議を開き、さらに十四日朝から京大清風荘で補導会議が開かれた。この会議はCIC、CIEはじめ、斉藤国警長官、法務府高官の監視のもとに行われ、更にこれらの珍客のために山海の珍味をととのえて開かれ、同学会の解散、学生の処分を決定(している)。

いかに占領下とはいえ、京大の補導委員会が、警察やCICの監視下で開かれ、そこで学生の処分が決定されていることである(前掲「青年祖国戦線」、他)。当時の日本の植民地的な状況を反映している。

会員消息



映画「日本の憲法」と堀さん

松尾 孝(伏見区)

「燎原」2007号拝見、映画「日本の憲法」の製作には触れられていませんし、この件では製作を担当した堀昭三さんに状況をまとめてもらっては如何かと思ひます。なお、寺前いわおさんもご存じのように聞いています。憲法垂れ幕だったら市木さんでしょうね。

事務局から 確かに映画については堀さんからお聞きすべきでした。総会当日、参加者には映画「日本の憲法」の解説などをお配りしたのですが、6年前にDVDになり、かみがわ出版から発売(1050円)されたときのものでした。また市木さんは2007年の総会で講演していただきました。

民主運動資料館をぜひ

北原道彦(伏見区)

7月号の編集後記で紹介されている「民主運動資料館」建設準備会をつくって活動を始めるべきとの提案。是非頑張ってください。

新会員

釋恵子さん(北区)並木薫さん(千葉県)

片寄邦男さん(伏見区)

退会

中村誠輝さん(西京区)

情報

スクラップ



「革也と丹波」京都新聞丹波版が連載

7月4日から「京都新聞」丹波版で郷土史の研究者で、元須知高校教諭だった芦田丈司さんの「革也と丹波―岩崎旧邸の新資料をめぐって」が連載されている。8月8日まで前回の6回が、その後8月末から後半の6回が連載される予定。

れる予定。

丹後半島に米軍基地はいらない

府民の会がパンフレット発行

「京都に米軍基地はいらない府民の会」はパンフレット「Xバンドリーダーつてなに？」を発行、普及しています。これは、府民の会結成集会での東奥日報・斎藤光政記者の講演記録。青森県で長年、同リーダーの役割などを取材してきただけに説得力があります。副題は「なんで米軍が丹後にやってくる」。A5判200円。☎801・2308(府民の会)

「大飯原発再稼働と脱原発列島」

久美浜の阻止運動の記録も収録

このほど刊行された中野哲演・土井淑平編「大飯原発再稼働と脱原発列島」(批評社)の第3章に「丹後に原発はいらない!」久美浜原発阻止運動の記録が収録されている。筆者の永井友昭氏は元府立久美浜高校の教諭で分会書記長などを務め、反対連絡会の事務局長

あの時代語り続ける



「学徒で特攻」の兄弟

戦争、度とこれが最後との思い
岩井忠熊先生、学徒出陣70年で講演や新聞に登場

朝日新聞8月15日付

岩井忠熊先生、学徒出陣70年で講演や新聞に登場

学徒出陣70年、わだつみ像建立60年にあたる今年の夏、岩井忠熊・立命館大学名誉教授(本会代表)は講演や各紙の取材に大忙しでした。

8月3日の立命館大学土曜講座では「学徒出陣―わだつみ世代の伝言」と題して講演、特攻の体験を語り、「9条改憲を提唱する政治家たちは、自らは戦場に赴かない。ならば私たちがかつての学徒兵は二度と戦争を起こさぬために、これが最後との思いで過去の日本を伝えたい」と会場いっぱい聴衆に訴えました。

朝日新聞は8月15日付の社会面トップに「あの時代語り続ける―『学徒で特攻』の兄弟」の見出しで兄・忠正さん(93歳)とともに登場、「戦争二度とこれが最後との思い」と4枚の写真つきで載っています。毎日新聞京都版でも大きく取り上げられました。

催し案内

9条京都のつどい

9月21日(土)午後2時〜シルクホール。講演「憲法のあらたな動きとこれに対決する私たち」小森陽一・東大教授、代表世話人の安斎育郎、益川敏英、有馬頼底さんのスピーチ、野田淳子さんのライブなど。無料。

永原誠先生を偲ぶ会 9月22日(日)午後2時から中京区のコープイン京都で。当日は遺著「消えた広島―ある一家の体験」が参加者に贈呈される。会費3000円。

編集後記



▼参院選選挙区で当選した共産党の倉林(京都)、辰巳(大阪)、吉良(東京)氏の共通点は政策を自分の言葉で語っていたことだ。好感がもてた一ある新聞記者の弁。驚いたのは民主党のボスターの「再び、京都から」の文字。一瞬、共産党のボスターかと思った。結局、再び京都から共産党が勝利した。▼「その時、私は…」に載せた金祐銓氏は、この一文の前に「独立運動家・南昌寧、金道漢、尹東柱など数多くの愛国志士たちが獄死した福岡刑務所跡地を訪れ追悼した」と書く。記録されていない在日活動家の軌跡も本誌に収録しておきたいものだ。(湯浅)